

[国 語]

## 翻訳文学における新たな授業づくりの方法と実践

— 『故郷』(魯迅)の訳文比較をとおして—

田中 綾子\*

### 1 主題設定の理由

#### (1) はじめに

平成33年度より中学校で全面実施される新学習指導要領では、国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、それらは「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されている。また、このような資質・能力を育成するためには、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現することが重要であると示されている。この「資質・能力」と「見方・考え方」との関係性を明確にした単元をつくっていくことは、これからの教育現場で求められるものといえるだろう。

「言葉による見方・考え方」を働かせるとは、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着眼して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであり、「様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習の対象としている」とある。つまり、その様々な「言葉」の側面をどう捉えるかが「見方」であり、その「見方」を働かせながら、文章の内容や表現について様々な思考を巡らせていくことを「考え方」として、実際の授業の在り方を検討していく必要がある。

また、国語科の全国学力・学習状況調査等の結果から、中学校では表現を評価することに課題があることが明らかになった。確かに、言葉がどのように選ばれ、構成・表現されているかに目を向ける生徒はそれほど多くない。生徒が表現のよさを実感できれば、もっと言葉を適切に用いたり、より効果的な工夫を採ったりしながら表現していくであろう。

#### (2) 問題の所在

これまでの国語授業でも、叙述に即して読むことや書いてあることを拠り所にして読むことは大切にされてきた。言語活動をとおして、改めてこの「言葉」に着目して学び合うことを「言葉による見方・考え方」を働かせた国語の授業では目指しているといえる。筆者は、これまでの国語授業において叙述に即して読み、根拠と理由付けを明確にして説明できることを生徒に意識させてきた。叙述に拠り所を求めない読みは、いわゆる「何でもあり」になってしまうからである。

しかしながら、教科書に掲載されている文章を安易に受け入れるばかりでは、教科書の本文が唯一絶対の文章という思い込みで陥ってしまうのではないだろうか。また、文学作品なら、教科書掲載の文章という一面のみを見て、作品すべてを理解したように錯覚してしまわないだろうか。そう考えるきっかけになったのが、翻訳文学である。小学校の『スイミー』(レオ・レオニ)や『お手紙』(アーノルド・ローベル)、中学校の『少年の日の思い出』(ヘルマン・ヘッセ)や『猫』(トーベ・ヤンソン)など、国語教材には翻訳作品が意外と多い。中には、複数の訳者によって翻訳されている作品もある。

そこで、本研究では『故郷』(魯迅)を扱う。『故郷』は、現在では様々な人物によって翻訳がなされ、作品の解釈が訳者ごとに大きく異なることがあるにもかかわらず、現行の教科書では竹内好訳の『故郷』のみが用いられ、筆者同様、現場の国語教師が他の訳文を検討し、授業を構想することは、現状としてはほとんどないだろう。『故郷』は、いわゆる定番教材だが、だからこそ新しい視点、「言葉による見方・考え方」を働かせた学習を構想する必要があると考える。複数の訳文を読み比べ、言葉や表現に着目しながらその差異を検討すれば、翻訳文学をより楽しみ、豊かに味わうようになるであろうことを生徒の姿から実践的に究明していく。

\*新潟大学教育学部附属長岡中学校

## 2 研究の目的

本研究の目的は、複数の訳文を比較して翻訳文学を読むことで、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉のもつ意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚が高まることを実践を通して検証することである。

## 3 題材と研究の方法

題材として、魯迅の『故郷』（1921年）を扱う。『故郷』は、中学校3年生の国語科における文学的文章として1959年に初めて1社に採択され、1975年版からはすべての教科書会社で採択され続けて今日に至る。また、『故郷』の翻訳で出版されたものは佐藤春夫訳を基本とし、竹内好、増田渉、高橋和巳等による20作近くの訳文が存在する。

しかし、現在、教科書で用いられているものはすべて竹内好による翻訳であり、『魯迅文集第一巻』（筑摩書房 1976年）を出典としている。そのため、生徒は竹内好の翻訳本文でしか、『故郷』を読んでいないのが国語授業の現状である。生徒にとって、教科書掲載の翻訳文学を読む際、そこに取り上げられている訳文は唯一のものであり、生徒からすれば他の翻訳が存在することは思いもよらないだろう。

そこで、教科書本文（竹内好訳）との比較対象として、井上紅梅による『故郷』の訳文を取り上げる。井上は、魯迅と同年であり、魯迅在世中の最も早い1932年に翻訳を行っている。また、二人の訳文には、その表現に明確な差異が見られる。訳文比較から竹内の言葉選びの意図や表現へのこだわりを見いだし、作品自体の価値をより高める翻訳とはどのようなものか、生徒自身が「言葉による見方・考え方」を働かせ、主体的・対話的で深い学びが実現されたかを生徒の変容を基に考察する。

## 4 実践

(1) 単元名 「教科書を超える - 翻訳文学の訳文比較から見えること -」（中学3年『故郷』魯迅）

(2) 単元における題材としての価値

- ① 翻訳文学であること。訳者によって作品の印象は変化する。
- ② 私小説形式ではあるが、事実を題材にした創作小説であること。
- ③ 作品の背景に重い現実があること。当時の中国は激動の時代であり、魯迅は小説を発表することで、新しい国民（自己の主体性を失わずに思考し、行動する国民）を創り出そうとしていた。

(3) 単元計画（全11時間）

本単元における育みたい資質・能力

認知的資質・能力	社会的資質・能力	実践的資質・能力
竹内訳と井上訳を比較し、竹内の言葉選びの意図や表現へのこだわりを見いだすとともに、作品自体の価値をより高める翻訳とはどのようなものか考える。	訳文を仲間と意見を交流しながら読み、訳者の翻訳意図を探るとともに、翻訳文学の価値や魅力を広げたり、深めたりする。	さらに別の訳者による『故郷』も比較して読んでみたいと考える。また、他の翻訳文学にも興味をもって読んでみる。

次	○学習課題 ・学習内容	教師の手立て等
1次 (3時間)	○『故郷』を通読し、初発の感想を交流しよう。 ・人物や情景等についての気付きや疑問を分類して記入する。	・各登場人物や情景等に注目できるように、主な登場人物や情景を全体で確認する。
2次 (6時間)	○難語句を確認し、人間関係を整理しよう。 ・「故郷」の内容を理解するために語句の意味を調べたり、人間関係を整理するために人物相関図を作成したりする。  ○中心となる人物とその人物が物語を展開していく部分を中心に読みを深めよう。 ・物語を展開していく中心人物を確認し、重要なやりとりが描かれている箇所を重点的に読む。	・難語句については、意味調べのほかに必要に応じて補足説明を行う。 ・人物相関図のイメージをもたせるため、モデルを提示する。 ・社会科の授業において時代背景（辛亥革命時の中国、民衆の生活）について同時進行で学習を進めていく。

	<p>○『故郷』が翻訳文学であることに着目し、教科書本文（竹内訳）以外の訳文も読んでみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・井上訳を読み、教科書本文（竹内訳）と比べて、言葉の選び方、情景や人物の描かれ方など異なる箇所を探す。</li> </ul> <p>○それぞれの訳者が翻訳する際にこだわった言葉や表現について考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の自分たちの気付きから、課題をいくつか設定する。</li> <li>・二つの訳文を比較して読み、訳者の翻訳意図を考える。</li> </ul> <p>○検討した内容を互いに交流しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・竹内訳と井上訳それぞれの特徴を見いだし、何にこだわり翻訳をしたと考えられるか、根拠を明確にして交流し合う。</li> </ul> <p>交流①：同じ課題について追究したグループ同士 交流②：別の課題について追究したグループ同士</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初期の頃（魯迅在世中）に書かれたもので、訳文の表現に明確な差異があり、比較しやすい井上紅梅訳の『故郷』を用意する。</li> </ul>
3次 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○さらに別の訳者による『故郷』も読んでみよう。</li> <li>・藤井訳の『故郷』を読み、訳者それぞれが何を大切に翻訳をしたと考えられるか、根拠を明確にして説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・藤井省三訳の『故郷』を用意し、本単元の学びが身に付いているか、パフォーマンステストを行う。</li> <li>・藤井省三が『故郷』や翻訳について語ったインタビュー記事を用意する。</li> </ul>

#### (4) 指導の手立て

次に具体的な手立てとして、3点記述する。

##### ① 教科書本文（竹内訳）と井上訳を比較できるワークシートの活用

教科書本文（竹内訳）と井上訳を比較できるワークシートを活用して授業を進める。竹内と井上は、ともに日本を代表する魯迅研究者であるが、その訳文においては、はっきりとした差異を認めることができる。竹内は、政治と文学の対立の間で生きた魯迅に深く共感し、その強い思い入れ「竹内魯迅」と称される魯迅観をつくった人物である。そのため、思い入れの強さが訳文の端々に具現化されている。同時に、全体を通して漢文調で簡潔な印象を受ける文章である。一方、井上は、魯迅にののしられた人物と論評されたこともあり、斯界では紅梅の著作を学問的な組上に載せること自体半ば禁忌とさえなっている観がある人物だが、竹内訳とは違って原書により忠実に翻訳したと見られ、魯迅の苦悩がより鮮明になっている。本研究では、文体比較に偏ることなく、むしろ竹内訳の表現の巧みさに依って立ち、それらを引き立たせるような授業を展開する。

##### ② 訳文比較からの気付きを生かした追究課題の設定・選択

教科書本文（竹内訳）と井上訳を比較し、見つけ出した複数の差異から一つを選択させ、訳者の翻訳意図やその効果を追究する活動を設定する。二つの訳文を比較すると実に多くの違いが見られる。まずは、その違いを見つけさせ、それらの中から「最も印象が違ってくるのはどこか」「秀逸な表現と感じるのはどこか」「作品全体に影響を与えるような重要性の有無」を問うことで、生徒に課題意識をもたせる。そして、追究課題をいくつかに絞り、その中から一つ選択させる。自分の課題意識に基づいて、じっくりと深く考えさせることで、学習に対する充実感と竹内訳の巧みさを実感させる。その際、井上訳の巧みさを指摘する生徒の意見も尊重して取り上げることとする。

##### ③ 考えを広げたり、深めたりするための意見交流の場の設定

同じ追究課題を選択した者同士が意見を共有したり、理由や根拠を述べ合ったりすることで、自分の考えに自信をもたせるとともに、視点の違いに気付いて考えを深めさせる。また、別の追究課題を選択したグループとの意見交流をとおして、自分たちの意見と関連付けて考えを広げ、作品全体を読み深めるための手助けとする。

## 5 授業の実際と考察

### (1) 本時（8／11時間）までの様子

初読の感想において、「言葉や登場人物の名前が難しく誰が誰かよくわからない」との記述が多数挙げられたため、難語句の確認及び人物相関図（図1）を作成し、整理した。また、「中国の話で、時代背景が複雑そう」との感想を受けて、社会科の授業において時代背景（辛亥革命時の中国、民衆の生活）について同時進行で学習を進めてもらうこと

とした。

また、教科書本文で主人公を「迅ちゃん」と表記しているところから、作者である魯迅自身の実体験がモデルになった小説なのではないかと気付く生徒も多くいたため、『故郷』が翻訳小説であることを確認し、教科書本文となっている竹内好訳以外にも多くの訳文が存在することを伝えた。

すると、生徒からは「他の訳文も同じような感じなのか気になる」と興味を示す声が聞かれた。そこで、竹内訳と表現に明確な差異が見られる井上紅梅訳を提示し、比較読みを行った。二つの訳文を比較し、生徒から挙げられた差異を追究課題として整理したものは次のとおりである。

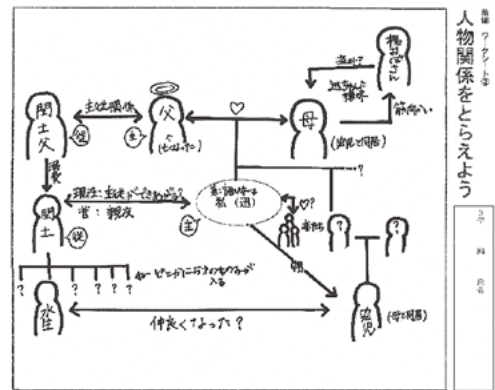


図1：人物相関図

- A 少年時代の敬語問題
- B 「獠」(竹内訳)・「土竜」(井上訳)問題
- C 「楊おばさん」(竹内訳)・「楊二嫂」(井上訳)問題
- D 再会場面問題
- E 故郷への思い問題

以上5つの設定された課題から各自、追究してみたい課題を選択し、グルーピングを行った。

(2) グループ交流の様子(上記BとCの追究課題グループの交流を中心に)

まず、B「獠」(竹内訳)・「土竜」(井上訳)問題を追究課題として選択した者同士での交流(交流①)を、次にBグループが、C「楊おばさん」(竹内訳)・「楊二嫂」(井上訳)問題を追究課題として選択したグループとの交流(交流②)を生徒の観察記録(ビデオ・ICレコーダー)及び筆記物(ホワイトボード)より分析する。

【交流①：B「獠」(竹内訳)・「土竜」(井上訳)問題を追究したグループの交流の実際】

生徒1：(竹内訳と井上訳で異なる表現を書き出したホワイトボードを眺めながら)竹内訳と井上訳だと井上訳の方がわかりやすいよね。そもそも「獠」の正体は明らかになってないし、この漢字自体も魯迅の造字って教科書に書いてあるし。

生徒2：井上訳の「土竜」だったら、わかるもんね。

生徒3：えっ、えっ、ちょっと待って。「獠」は「土竜」ってこと？違うよね？

生徒2：違う、違う。ただ、「獠」だと何のことを言っているのか読み手に伝わらないから、井上は訳すときに「土竜」にしたってことだよ。

生徒1：でも、「土竜」って訳していいのかな？だって、魯迅がわざわざ漢字まで造っちゃうんだよ。「獠」じゃなきゃだめなんじゃない？「獠」は魯迅にとって特別なんだよ。(ホワイトボードに「特別!」と書き込む)

生徒2：確かに「土竜」じゃ、つまんないような…。

生徒1：「獠」は謎に包まれた神秘的な動物として書かれているのかもね。他の動物じゃ代わりにならないんだよ。だって、「私」はいまだに「獠」がどんな動物かわからないんでしょ？うーん、閩土だけが知ってるってところがいいんじゃない？(ホワイトボードに「ふしぎなイメージ」「閩土だけ知っている」と書き込む)

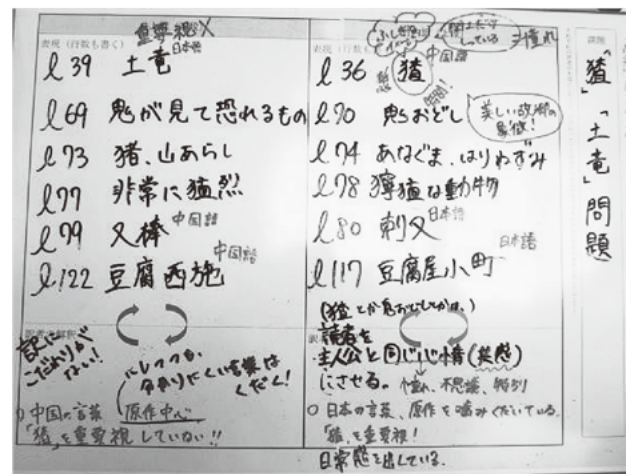
生徒3：おー、なるほどね！

生徒2：「獠」は、「私」が閩土に憧れてた少年時代の思い出の場面に出てくるよね。

生徒1：あー、だから「獠」=美しい故郷…みたいな。象徴？(ホワイトボードに「憧れ」「象徴」と書き込む)

生徒3：(うなずきながら)そうすると、「獠」は「獠」のままがいいね。

生徒1：美しい故郷の象徴だからね！(ホワイトボードに「美しい故郷の象徴!」と書き込む)



【交流②：Bグループと、C「楊お婆さん」(竹内訳)・「楊二嫂」(井上訳)問題を追究課題として選択したグループとの交流の実際】


<p>Bグループ：(Cグループのホワイトボードを見ながら) えー、やっぱり竹内訳の方がわかりやすいって思ってるんだあ。</p> <p>Cグループ：だって、「楊二嫂」(井上訳)なんて意味わかんないよね？楊さんのところの二番目の兄の妻っていう意味だよ。もう、わかんないでしょ？</p> <p>Bグループ：へえー、そういう意味なんだあ。</p> <p>Cグループ：そうなるよね？だったら「楊お婆さん」(竹内訳)の方が絶対わかりやすいし。</p> <p>Bグループ：でもさー、うちのグループの場合でいくと竹内訳の方が「猿」で、井上訳の方が「土竜」だから、逆転するよ。「土竜」(井上訳)の方がわかるじゃん。</p> <p>Cグループ：うーん、どういうこと？</p> <p>Bグループ：だから、わかりやすいとか、わかりにくいとかの問題じゃないと思うんだよね、大事なところ。</p>	
--	--

写真1：Bグループと交流するCグループの様子

Cグループは、「楊二嫂」という原文をそのまま生かした井上訳を「原文を忠実に翻訳している」とし、「楊お婆さん」と訳した竹内訳を「日本人に分かりやすいように表現を変えている」としていたが、Bグループとの上記のような交流を経て、「翻訳は、分かりやすいかどうかだけで良し悪しが決まるものではない。訳者がこだわりを見せる言葉や表現を探し、その言葉や表現にこだわるのはなぜなのか、ということを追究していかなければならない」との考えに至った。このことから、Bグループとの交流がCグループに新たな視点を与えたといえる。

### (3) グループ交流後の様子

A～Eの追究課題を選択したすべてのグループとの交流を終えたBグループは、「多くのグループが竹内訳の方が分かりやすく、魅力的に感じるとするのは、一文が長すぎず、原文を生かすところと言葉の意味を砕いて表現するところがよく考えられているからだ」また、「竹内が読者を主人公と同じ心情にさせるからだ(共感)」と結論付けた。このことからBグループは、訳者が原作のどこにこだわり、読者に思いを伝えるため、言葉や表現をどのように選んだかに迫ることで、読みを豊かにしたといえる。

### (4) 単元終末までの様子

次時、「他の訳文も読んでみたい」という生徒の要望から、藤井省三訳の『故郷』を用意し、本単元の学びが身に付いているか、パフォーマンステストを行った。また、藤井が『故郷』(魯迅)や翻訳について語ったインタビュー記事を提示し、訳者の実際の思いを知ることができた。以下は、単元末に行った生徒の振り返りである。

<p>『故郷』を通じて、中国語を日本語に翻訳するにあたり、問題が出てきて、それを解決するため、訳者が自分の解釈を決めて、工夫をします。それは、名称から表現、セリフにいたるまで大小様々な違いがあり、人によってオリジナリティが出るということを学びました。そこから、たとえ類義語でもニュアンスが違うため、手に取った訳文によって読み手の解釈も多少なりとも変わるところがおもしろさでもあり、訳者が特に気を使っているところだと思いました。</p>	<p>『故郷』の単元で学んだことは、作者だけでなく、訳者も文章をつくり上げているということだ。竹内訳は「感情の揺れ動き」、井上訳は「立場の壁」を重点に訳している。当然、与える印象も全く別のものになる。どういう目的で書いたのかを知っているのは作者だけで、どう読み取るかは自分次第である。つまり、訳者の解釈の仕方によって作品の良し悪しが大きく変わってくるのだ。だから、作品をつくるのは作者だけではない。陰に隠れた訳者の存在も重要なのだ。</p>	<p>この単元で学んだことは、翻訳作品というのは原文を書いた人だけではなく、翻訳する人によって印象や流れ、読み手の感じ方が大きく変化するということだ。竹内訳や井上訳、さらに藤井訳を読んでみて、それぞれの訳者が何を考え、伝えようとするのかによって主人公の一人称が変わるなど、様々な工夫がなされていることを知った。だから、今回の単元のように、いろいろな文章を読んでみることは、さらに読みを深めることにつながると考える。</p>
---	--	---

翻訳に伴う問題を解決するための  
訳者の解釈と工夫  
類義語とニュアンスの違い

訳者次第で作品の良し悪しが変わる

様々な文章を読んでみることは、  
さらに読みを深めることに  
つながる

<p>『故郷』の学習で私は、訳者の大切にしたいことがそれぞれ違うからこそ、訳者によって文章に違いがあっておもしろいのだと学びました。竹内訳は「魯迅の思想を分かりやすくする」ということに、藤井訳では「魯迅の文体を伝える」ということに重きを置いているため、竹内は長い文章を短く、歯切れのよいものにし、藤井はできるだけ長文のままにしていると知ったからです。文章から作者だけでなく、訳者の意図まで読み取れるほど、翻訳文学には深みがあることも感じました。</p>	<p>この單元では、三人の訳者による『故郷』を読み比べた。それらをおして学んだのは、訳者は伝えたいことを明確にして訳しているということだ。例えば、藤井訳の「迅」の一人称「僕」には、少年っぽさや未熟さが表現されている。一方で、竹内訳では「私」と表現することで、「迅」の昔と今の違いを伝えなかったのではないかと思う。このように、表現の一つをとっても訳者の意図が感じられ、おもしろかった。他の作品でも、違う訳者で読み比べてみたい。</p>
<p>『故郷（藤井省三訳）』、資料：『『故郷』再研究』『翻訳者から見た『故郷』』（藤井省三へのインタビュー）を読んで</p>	<p>『故郷』を「他の訳文でも読んでみたい」、 今後、「翻訳作品を複数の訳文で読んでみたい」 アンケート結果：31人／39人 「実践的資質・能力」の表れ</p>

## 6 成果

今回の実践において、訳文比較から読みを深めることは有効であったと考える。翻訳文学に訳文が複数存在することを知り、その比較からしか見えてこない読みがあった。

まずは、生徒が翻訳文学の訳文比較を初めて経験するにあたり、教科書本文（竹内訳）との比較対象として、はっきりとした差異を認めることができる井上紅梅訳を選択したことが、生徒の学習意欲を喚起したと考える。次々と訳文の違いに気付いた生徒は、口々に「ここが違う」「ここも違う」と夢中になってそれぞれの訳文を読み進めていた。また、その差異を並べてワークシートに記入することで、言葉や表現の違いが明確に認識できるとともに、それぞれの訳者がなぜ、そのような言葉や表現を用いたと考えられるか、気付きや考えをホワイトボードに継続して記入することで、生徒が自身の思考の流れを整理、可視化するのに有効であった。（「認知的資質・能力」の表れ）

次に、生徒の気付きを基に、訳者の翻訳意図やその効果を追究するためのテーマを5つに絞ったことで、自分の課題意識に基づいて、じっくりと活動に取り組むことができていた。

さらに、同じ追究課題を選択した者同士と、別の追究課題を選択したグループとの2回の意見交流の場を設定したことで、作品の一部分と全体を関連付けて読み深めることができた。生徒は、自分の考えを相手にわかってもらえるよう、言葉を選びながら話すとともに、質問を受けることでさらに自分の考えを問い直すため、話し合いの中で考えが明確になり、まとまっていくことを実感していた。（「社会的資質・能力」の表れ）

## 7 課題

課題として、生徒が本單元によって育まれた力を、対象が変わっても機能させることができるかという点が挙げられる。生徒が本單元で用いた読みの方略の有効性を実感し、さらには、なぜ有効なのか、翻訳文学とは異なる対象でもそれに適合するように自分で工夫し、実行していけるようになるためには、実践を重ねるほかない。

今回は、魯迅の『故郷』を取り上げたが、複数の訳者がいる翻訳文学は他にも多数存在する。中学校国語の教科書に限って見ても、『少年の日の思い出』と『故郷』には共通点が見えてくる。ドイツ文学であるヘルマン・ヘッセ作『少年の日の思い出』は、1947年に中学2年の教科書に登場して以来、繰り返し採択され、現在は中学1年の教科書、5社すべてに収載されている。その5社はいずれも高橋健二による翻訳を採用しているが、岡田朝雄訳のものと比較して読んでもおもしろいだろう。訳文比較が、1年時の授業段階で意図的に設定され、3年時で『故郷』を学ぶ際に汎用的に活用されることが望ましいと考える。

## 引用参考文献

- 勝山 稔「改造社版『魯迅全集』をめぐる井上紅梅の評価について」東北大学中国語学文学論集, 2011  
 国立教育政策研究所『国研ライブラリー 資質・能力 [理論編]』東洋館出版社, 2016  
 中村 和弘／東京学芸大学附属小学校国語研究会『見方・考え方 国語科編』東洋館出版社, 2018  
 奈須 正裕『資質・能力と学びのメカニズム』東洋館出版社, 2017  
 藤井 省三 訳『故郷／阿Q正伝』（魯迅）光文社, 2017  
 魯迅 作 井上 紅梅 訳『故郷』青空文庫, 1932